

博士論文概要書

文学テキストにおける視点構造

高野 敦志

『文学テキストにおける視点構造』

本研究の概要を以下に述べる。全体は以下のような構成となっている。

- 第1章 研究目的と方法
- 第2章 先行研究
- 第3章 小説の形式と視点
- 第4章 共感および同化
- 第5章 語り手の顔出し
- 第6章 対象化
- 第7章 欧文脈
- 第8章 小説における表現と理解
- 第9章 本研究のまとめ

1. 本稿の研究目的

本研究「文学テキストにおける視点構造」の目的は、主に小説のテキストを資料として、書き手の表現が読み手にいかに伝達されるかという構造を明らかにすることである。「視点」の文法研究には久野暉『談話の文法』があるが、用例の多くは作例であり、実際のテキストを分析対象としたものではない。「視点」の実態を明らかにするためには、久野が指摘した現象を視野に入れつつ、書かれた文章を有機的に分析しなければならないのである。その際、「視点」に関する多くの問題を提供してくれるのが、文学テキスト、とりわけ小説の文章なのである。

一方、国語教育の立場から文学テキストを、いかに読み解くかについて論じた西郷竹彦や、認知科学の観点から読書体験について論じた宮崎清孝などの研究がある。それらは小説という虚構の表現を、いかに理解するかというプロセスから明らかにした点で注目に値する。ただし、あくまでも読み手の立場からの分析であり、表現効果など個別の現象を扱ったものではない。

本研究は久野の文法研究を参考にした上で、文学テキストにおける「視点」の問題を、読み手の理解という鑑賞の立場だけではなく、書き手の表現を含めた全体的なプロセスとしてとらえ、概括的な形だけではなく、小説の形式による違いも含めて解明すること

を目指すものである。それによって、文学テキストを対象とした「視点」研究が、体系的に進められていくことが期待されるわけである。

2. 研究の方法

分析に当たっては、明治期から昭和期にかけての文学作品を対象とし、調査する研究対象によって、個別の作家や作品を選定するか、コーパスを用いて分析を行うか、方法を使い分けることにした。第3章では小説の形式に違いが表現効果にどのような影響を与えるか、先行研究で取り上げられたものや、顕著な特徴を示す作品を具体例に示して分析した。第4章では小説の冒頭、「視点人物」と主題化、「視点人物」の指標といった問題を、読み手の「視点人物」への「同化」という観点から分析した。第5章では「語り手の顔出し」という現象が、単一の作品の中にどう現れるか、樺島忠夫が用いた分類を参照しつつ、全体像を明らかにした。第6章では、一人称の語り手や三人称小説に現れる「視点人物」が、主題化されずに「対格」という形で対象化される現象を、久野暉の文法研究を参照しつつ分析した。作家が同様のテーマを、一人称で書くか、三人称で書くかといった表現選択の問題を、主語に現れる「有生名詞」「非有生名詞」の違いから明らかにした。第7章では「非有生名詞」が主語の位置に来て、語り手の「私」が対格で現れる構文を、コーパスを用いて収集した上で、国立国語研究所編の『分類語彙表 増補改訂版』や、村木新次郎らの動詞の他動性に関する研究を参照しながら、表現効果という観点から整理した。第8章では時枝誠記や永野賢、西郷竹彦、宮崎清孝らの先行研究を参考にしつつ、文学テキストの表現から理解までの過程を仮説として提示した。

3. 本稿の構成

具体的な各章の概要を以下に述べることにする。第1章「研究目的と方法」第2章「先行研究」に続き、第3章「小説の形式と視点」では、川端康成の「内部視点」「外部視点」の分類、西郷竹彦による「視点人物」「対象人物」の有無による小説の分類を参考にして、小説の形式が表現効果にどのような影響を与えているか概観する。一人称の「私」が省略されることが多い日本語の小説の場合、一人称で書かれているか、三人称で書かれているかは、テキストの一部を見るだけでは判断に迷う場合がある。また、「視点人物」の有無が小説の形式といかなる関係にあるか、顕著な特徴を示す具体例を挙げ

て確認にした。

第4章「共感および同化」では、まず、読み手の「作品世界」への「共感」、および「同化」という観点から、小説の冒頭の分類を試みた。次に、三人称小説において、読み手が「視点人物」を認める際の指標となるものを、実際の文学作品から抜き出し、その分析を行った。分類に当たっては、指標がテキストのどこに現れるかなど、文法的な観点を取り入れて行った。

資料としては、芥川龍之介の作品を用いた。短編作家である芥川は、作中に「作者」を直接介入させたり、「副次的視点」「複数的視点」など、小説のスタイルに関して実験的な試みをしている。芥川という作家を調査対象に選んだのも、多種多様な用例が収集できるからである。これによって、西郷竹彦が「視点人物」と呼んだものの実態が明らかになったと考えられる。

第5章「語り手の顔出し」とは、三人称小説の中で、「語り手」が作品の人物にコメントしたり、注釈を加えたりすることである。かつて小林英夫はそれを「作者の顔出し」と呼んだが、小説を書いた作者と、小説における「語り手」は、分けて考える必要がある。小説を作者自身と切り離し、テキストを自立したものとして理解しようとする思潮は、フランスの批評家、ロラン・バルトらの構造主義的な文学研究の影響を受けている。

樺島忠夫は小林英夫の「作者の顔出し」を、「語り手の顔出し」という形で修正している。本研究では樺島の「語り手の顔出し」の研究を敷衍する形で、三島由紀夫の長編「愛の渇き」を分析の対象として用いた。この作品は語り手からのコメントや注釈がきわめて多く、単一の作品における「語り手の顔出し」を、全体像の形で提示するには最適である。実際に具体例を示しながら、「語り手の顔出し」という現象を、付属語レベルから文レベルまで整理した。樺島の提示した分類を発展させる形で、三島の「愛の渇き」という作品に散在する「語り手の顔出し」の全体像を図示したのである。これによって、抽象的にしか示されていなかった「語り手の顔出し」が、有機的にとらえられるようになったと考えられる。

第6章「対象化」では、「視点人物」や「語り手」が、他者から働きかけを受ける文型を扱った。「視点人物」や「語り手」は、主題化されることが多いと考えられる。これはメイナード・泉子・Kが『談話分析の可能性』で指摘していることである。他者から働きかけを受ける場合には、受動文の形をとるのが「無標」であり、「対格」の形で現れるのは「有標」であると考えられる。では、なぜ、あえて「有標」となる形、すなわち、「視点人物」や「語り手」が「対格」として現れる文型が選択されたか。その表

現効果について考察したのである。

この種の文型を用いることで、読み手の「物語世界」への理解がいかなる影響を受けるかについて分析した。資料としては梶井基次郎の小説を用いた。梶井は「私」を語り手とした一人称小説と、「喬」「峻」「堯」といった人物を「視点人物」にした三人称小説を書いている。肺病に病んだ主人公を一人称と三人称で書き分けている点でも、「視点」研究の対象として興味深い。「語り手」や「視点人物」が対象化されて「対格」として現れる表現効果とともに、一人称小説、三人称小説という形式の選択が、「語り手」や「視点人物」の対象化と関係があるかということも調査した。その際、主語に「有生名詞」「非有生名詞」のいずれが来るかを判断の基準に据えた。

第7章「欧文脈」は、第6章の分析を発展させる形で、一人称の「私」が主題化されずに「私を」という形で対象化される現象を、コーパスを用いて分析することにした。森岡健二『欧文訓読の研究』によると、「欧文脈」はオランダ語を漢文訓読式に読み下したことから始まったとされる。明治以降、西洋文学を模範とした日本文学においては、ヨーロッパ言語の直訳から生じた「欧文脈」が、一部の作家に採用されるようになったのである。

ここでは主語の位置に「非有生名詞」が来て、語り手の「私」が「対格」で表される構文を「非有生主語の他動詞構文」と呼び、その文型を整理した上で、表現効果についても考察した。その際に、国立国語研究所編の『分類語彙表 増補改訂版』や、村木新次郎らの動詞の他動性に関する研究を参照して、文型を整理する上での規準を策定した。資料としては、新潮社で電子化された『新潮文庫の100冊』『新潮文庫 明治の文豪』『新潮文庫 大正の文豪』『新潮文庫の絶版100冊』から、全文検索で収集したものを用例として用いた。

第8章「小説における表現と理解」は、第3章「小説の形式と視点」で分析した小説の形式の問題を、書き手の表現と読み手の理解という観点から、改めて論じたものである。言語過程説で知られる時枝誠記の「言語による思想の伝達」、永野賢の「主観的脈絡」、宮崎清孝の「見え」や西郷竹彦の「視点人物」などの概念を参照し、小説における伝達プロセスと、小説の形式との関わりを仮説として提示したものである。

最後に、第9章で「結論」を示した上で、「残された課題」に触れて、今後の研究の方向性について言及した。

4. 結論

本研究全体を通して分かったことのうち、主要なものを以下に示すことにする。

- ①語り手の存在が希薄になって非人称化すると、「人称制限」にとらわれなくなる。特定の第三者の知覚や内面に言及したのが、「三人称制限の視点」であり、言及する対象の人物が複数になった場合、「三人称全知の視点」となる。
- ②「三人称限定の視点」に対し、「限定的視点」の法則を厳格に適用した場合、「視点人物」の動きを外部から描写できなくなり、「一人称の視点」との違いも乏しくなる。人物の内部と外部をともに描写できる「三人称小説」の長所を損わないことが、読み手の作品理解を容易にするためには重要である。
- ③場面が切り替わっているだけでは、「視点の移動」が起こっているとは言えない。「視点人物」が登場せず、誰が見ているか分からない場面が切り替わっている場合、空間を自在に移動する「三人称客観の視点」（＝語り手の眼）のみが支配している。
- ④三人称小説に登場する「視点人物」の指標は、「五感に関する指標」「意識に関する指標」「人物に関する指標」「直示表現に関する指標」「授受表現に関する指標」に大別される。ただし、外部から観察可能な指標の場合には、知覚や意識の内容が描かれる必要がある。
- ⑤「語り手の顔出し」を弱いものから強いものまで整理する基準として、「語り手の潜在と顕在」「読み手への働きかけの有無」「価値判断の有無」が挙げられる。
- ⑥「視点人物」の知覚や内面を描写するなど、「人称制限」に違反する非人称化した語り手が、一人の人間として、作中人物などに評価やコメントを加えたり、問いを発したりすることは、非人称化に反するばかりでなく、読み手が「物語世界」に仮想的に没入することを妨げかねない。ただし、衝動的に動く人物を描く場合は、語り手が自己の見解を述べて説明を付加する必要がある。また、語り手が読み手に疑問を投げかけることで、物語への参加を促すことも可能となる。
- ⑦「語り手」や「視点人物」が対格で表される理由としては、「直前の文との主題の一貫性を維持する」「出現した存在の動作性を前面に出す」「心理的に圧倒される効果を狙う」などが認められる。
- ⑧「非有生名詞」が主語となって人物に働きかける構文は、「三人称小説」より「一人称小説」において好まれている。

- ⑨「非有生主語」の他動詞（使役）構文は、「原因-結果構文に言い換え可能」な文型と「原因-結果構文に言い換え不能」な文型に大別される。前者は語り手が心理的に圧倒される状況を表すために、あえて日本語としてはこなれない言い回しを選んだという表現意図が感じられる。後者は慣用表現や位置関係、移動の状況を描写するために用いられ、日本語としての違和感は乏しい。
- ⑩読み手の理解という観点から、小説の形式を比較した場合、「三人称限定の視点」がもっとも優れており、「三人称客観の視点」がもっとも劣っている。

本稿では小説の文章を資料として、書き手の表現が読み手にいかに伝達されるかという構造を明らかにした。小説という虚構のテキストを理解する際に、「視点」という問題がいかに関わり、読み手が小説の文章に接する際にどのような規則に従っているかを提示した。文学テキストにおける「視点」の問題を、表現と理解というプロセス全体との関わりから調査したことで、これまで概括的にとらえられてきた伝達プロセスを、小説のスタイルとの関連で解明した点も成果と言える。

5. 残された課題

以上、「文学テキストにおける視点構造」の研究成果のうち、主要なものを掲げた。小説の形式に関しては、「一人称小説」の変種として、語り手の「私」が、聞き手の「あなた」に語りかけるスタイルがある。一人称小説は「人称制限」に違反せず、違反することによって三人称小説になると、筆者は考えるわけだが、「二人称小説」の一部には「人称制限」に違反していると疑われるものもある。「人称制限」に違反するような描写が、どのような表現効果を狙って書かれたかなど、解明されるべき問題が残されている。

小説の冒頭の表現に関しては、第4章で分類を試みたが、小説の末尾や、冒頭と末尾の照応関係などは扱えなかった。この種の研究における最大の困難は、特定の作家のテキストのみを扱えば、文学研究としての精度は高まる一方で、表現研究としての普遍性がどこまであるかという疑問が生じる点である。

現在、筆者がもっとも関心を抱いているのは、文末表現と「視点」の関係である。日本語では、過去の出来事であっても、非タ形の形で表現することがある。これは日本語の作品と、翻訳された作品の述語の形を比較する過程で、明らかにされたことである。

小説の語り手が「物語世界」の外部から、ある事件を過去の出来事として説明する場合、タ形が用いられるが、「物語世界」で「視点人物」が、その時点で体験しているように描く場合には、非タ形が好まれる。ただし、「瞬間動詞」で表される動作においては、「視点人物」が目にした瞬間には、動作が終了しているため、タ形で表されるのが一般的と見られる。「視点」と文末表現の関係を解明するには、テンスとアスペクトに関する文法研究と、表現研究としての「視点」研究の、学際的な調査が求められるのである。

欧米の物語論では、**focalization** 焦点化という概念が用いられている。本研究で論じた問題と **focalization** が、どのような関係にあるかなども、今後の課題としたい。